

#### 第四章似たような、東北地方。

どんどん、クルマを北へ北へ、と深夜3時に福島県に到着。まず、驚いたのは、ウチの田舎より街灯、コンビニの数が圧倒的に少ないということです。知人Hのクルマに乗せてもらって、こちらのほうは、公衆便所すらない。『道の駅』で、用を足すとすっきりするが、秋だというのが、気温4℃。濃霧のため5m先が見えない。無論、ラジオも入らない。

大内宿にはいると、藁葺き屋根の民家が目立つ。というか、そのオンパレードだ。みんな、私のことをしらないのに、『おはようございます』『おはようございます』と、代わる代わる挨拶をして通り過ぎていく。電信柱もなく、大昔の部落とはきつと、こんなもんだろう、と思う。

有料道路も何件かあったが、なぜか検問に人は居らず、タダで通貨、会津近郊から、やっと、都会らしい都会になってきた、とくに、歩道、道路、街灯、などの生活関連社会資本がしっかりしているというか、まあ、だれがみても、地方都市と定義づけることが、できそうな、光景だからである。

会津といえば、まず、戊辰戦争、白虎隊だろうが、600円払って、鶴ヶ城にはいると、なんだか、ミュージアムといった感じだ。しかも、徳川の家紋がぶらさがっている。15代将軍からけむたがれてた、松平容保だが、最後まで忠誠を誓ったから、徳川〜と謳われているわけか。

まるで、迷路のようなミュージアム城を後にして、知人Hは新潟を見て帰りたいというので、会津若松駅で別れた。

ここからが、仙台猛烈、賛美、賞賛、礼賛、喝采、聖なる〜、と猛烈に褒め称える、「この素晴らしき地方都市」はスタートする。

まず、空気、都会の空気は汚いといわれているが、それは科学上のものであって、会津も、環八、ウチの集落も、これといってかわらない。むしろ、驚いたのは、言葉だ。

まず、駅員に「仙台まではどういったらよろしいのでしょうか？」と訊ねると、「まず〜、郡山にでて、それから、福島駅まで行って、それか東北本線に乗って、行ってください。文章にすると、解らないのだが、この微妙なアクセントがなんともいえず、乙なものである。ここで、わたしは東北にいらってことが、初めて実感できた。

みどりの窓口では2人の駅員が、切符を裁いていたが、なにより、第三章で紹介した、『東京みどりの窓口』より、3倍くらい、トロイのだ。東京では、一人の駅員さんが、ロボットの如くテキパキと性格にさばっているのに対し、こちらはノロノロとまるで、パソコン初心者波のトロさで、さばっている。地方都市であることを改めて実感。会津は交通の便が悪く、こちらと同じくクルマ大国だが、バスが頻繁にでているため、住民は苦勞ないようだった。東海道線のお古？と呼ぶような赤いポンコツ電車に乗ってさあ、出発！

#### JR東日本のお荷物。

というわけで、まずは、仙台に行くためには郡山、福島経由で行かないといけないことが解り、半眠半覚のまま、電車に揺られて郡山を目指しているのだが、まず、電車内の広告がハンパじゃなく、少ない。スポンサーがおないのであろう。乗っている乗客も、ウチの県みたいに通学だけでなく、観光客から、ビジネスマンまで、バラバラだ。まあ、とにかく大赤字であることは間違いない。それを山手線だか、中央線が、養っているわけだ。

車窓からみえるのは森林でもなく、畑でもなく、草地、荒地である。神奈川の横須賀近郊のこともかいたが、こちら地主が全く手のつけていない土地がめだつ、そして、郡山につくまで、こんな景色や、ウチの隣の市を髣髴させる、ポロッチイ、アパート等、郡山に近づくにつれ、目立ってきた。しかし、日本一の面積を誇る郡山市は、以外や以外、タダ広いだけであって、人口は分散しているようである。駅に着いても、『え？これがあ……』といったくなるような気分である。トイレは一応水洗だったが、キヨスクもなく、腹もへ

ってきたので、喜多方ラーメンえをくうのは出費の無駄と決め付け、一杯 380 円の掛けそばでガマンするが、味は、ウチの県のうどん屋と同じレベルだろう。

駅員に次の電車は何分後に来るか、聴いたが、一時間後と、いわれた。一時間(!!!)、啞然としたが、地方にはよくあこと、とあらかじめ覚悟していたが、やはり退屈だ。ラジオにスイッチをいれると、お? 入った。でも、雑音がひどいな。何番ホームだったか、忘れたが、福島行きはもう到着している。

車内にはいると、ムツとした暑さがこみ上げる。腕時計で温度を調べると 31 度あった。あの、朝の気温 4℃ってのは、どうなったのだろうか? そして、福島行きが出発。この電車はそのまま、仙台行きになるらしい。

東北って、こんなもん?

杉田、とか、安達だとか、芸能人の苗字がつづくような駅をすぎていく。ただ、女性がだんだん、美人になってきている嫌いがある。

制服も、セーラー服でなく、ブレザーでミニスカートだ。携帯をいじっている女子高生はX県と変わらないが、男女共学という、考えだけは新しい革新的らしい。

ただ、住宅地だけは、安価でかなりゴージャスな一軒屋が目立つ。家賃もやすいのであろうが、それにしても、この家の量に較べて、皆さん一体、何処にお勤めになっているのだろうか? なんて、思っていると、工業団地が見え、夥しいほどのクルマが駐車している。東北は工業が盛んとはきいたことがないが、なにより農地が全く皆無なのだ。

それでも、こんな、僻地にも大学はあって、ゴツイお兄さん方が乗り込んできた、きつと地方はスポーツしか売りがいいから、体育会系の大学だろう。自分なら、いかないな。

この素晴らしき輝ける都市仙台

福島につくと、ラジオがハッキリと入る。さすが、県庁所在地だけあるが、こんなのはまだ、「序の口だ。ふくしま FM」なんてはいるし、阿武隈川を渡ったあたりからはっきりしてきた。もう、駅がハンパじゃなく、近代なのだ。いや、近代じゃなくて、フューチャーかもしれない。

もう、「こおり」駅をすぎたあたりから、興奮を抑えられず、勃起する。とにかく町並みが『綺麗』『素晴らしい』『かつこいい』以外形容のしようがないのだ。

大河原町にはいると、景色は田舎なのだが、もう、住民は「私たちは田舎もんじゃないのよ～」と暗黙の了解だ。そう、仙台で働く方々のベッドタウンなのだ。私は一駅、一駅ごとに、「すごい! すごい!」と、人目も気にせずに絶叫した。それほど、白石駅あたりから、スゴイのだ。こうして、射精をこらえて、仙台に到着。初めにしたことは運子だった。もう、夕方 5 時だし睡眠不足がたたっているのだから、ホテルで一眠りしてから、夜の町を徘徊することにしたが、そのインターネットで検索したカプセルホテルがどこにあるかわからず、『観光案内所』で聴くと、色白で、いかにも、東北美人のオネエさんが、地図をもって丁寧に教えてくださった。

第二章の『私知りません!』と突っ張った、原宿とは打って変わって違う、あきらかに、ソフトで、素直だ。駅から眺める西口の風景は札幌駅南口とたいしてかわらないのだが、オネエサンのいわれるがまま、アーケード街に入ると、活気に満ちている。第一章で、田舎の商店街は死んでいるという、趣旨のことを書いたが、こちらはその対称的存在だ。

ただ、伊勢崎モール同様、薬局とマックと吉野家が目立つのは、全国共通のようだ。

クリスロードと名づけられたこの通りは、いったいどこまで、つづくのかわからないが、「十字路にぶつかったら、右折せよ」の言葉に倣い、右折すると、マッキントッシュ専門店に出くわした。こんな、ウチの県じゃ、絶対ないというか、インターネットそのものの普及がおくれているのだ。

突然、後ろから、ポンと肩を叩かれた。まったく知らない、オネエサンである。『この神

落としましたよ。お兄さん』と、にっこり笑って、去っていった。

さて、地図にいれば、アーケードからいったん抜けろとかいてあるので、抜けてみたら、そこは仙台の歌舞伎町、とも呼ぶべき、国分町だった。地元の人はどうおもっているか知らないが、わたしはここを、そう命名した。

とにかくすごいのだ、キャバクラだの、ホストクラブだの、ソープだの。コンビニに入って、その場所を聞くと、すぐ近くだというのが、ヤのつく自由業のお方が夜は跋扈しているはずだ！そうおもうと、勝手に、ビビッてしまい、もう一軒のほう捜すが、皆目検討がつかず、鋼板に飛び込むが、おまわりは自分だけ、わかっている、知らない人に教えるのは下手である。これは全国共通だ。

しかたなく、通行人に聞くことにした。まずは、自転車にのっている、オネエサン。「このちかくにミニストップというコンビニはあるか？」ときくと、ニコニコしながら、まともや、ソフトに接してくださった、「あちらですよ～」だって。そうして歩いていると、100メートルぐらい進んで、さっきのオネエサンがおいかけてきた、「そっちはちがいますよ～」だって、なんて親切なひとだろう。

ちなみに好みのタイプであるが、ナンパする度胸がない自分に嫌悪感がみなぎった。

また、交番にはいったが、予想どうり本人だけ、わかっているようである。ただ、ウチの県の警察みたいに「なんで、下調べしてこなかった～!!!」と、怒鳴りつけられないだけましかも……。とおもい、警察官の言う通り、道をいったら、やっぱり迷子になったが、ラブホテルらしきものを発見してそれがそれだった。

入り口は狭く人とのすれ違いすらできないほどで、私がいいるなり、受付に壮年の女性が（奥は住居になっているのであろうか）壮年の女性がでてきた。「いっしやいませ」はカプセルホテル業界では存在しないようである。チャックインを済ませ、汗だくのまま、布団に転がり込むなり、いきなり寝てしまった。まあ、午前一時に出発したからあたりまえなのだが、つい最近まで、『引きこもり』だった、自分未開の地で、しかもカーテン一枚で仕切られている空間だけで、眠れるようになったとは、随分進歩したものである。

中には、ブラウン管のテレビが一台ドーンとおいてあるだけで、いままで、宿泊してきた、カプセルホテルとは、一線を画しているようだが、さすが、杜の都といっても、テレビ東京は入らないらしい。チャンネルが一つ少ないことに気がつく。このホテル全体の稼働率は10%いっているかいないかである。

気がつく、午後7時半であり、例によって、夜の街徘徊を始める。ただ、未開の地と、ホテルがあまりにも小さすぎるため、『戻って来れないのではないか？』という懸念もかくせないで、とりあえず、アーケードの見学だけはしておきたいとおもい、角を曲がるごとに『左』とか『右』とかをいいきかせる。

私は、ハンパじゃない方向音痴なので、とりあえず、クリスロードの前後を歩くことにした。このアーケードから出てはいけない。

デジカメや電子辞書や録音機など、全部ホテルにおいてきたままだ。

とりあえず、腹が減ったので、仙台名物の牛タンを……。とはいかず、あくまでも、観光でないことを確認するために、ロッセリアに入り、リブサンドバーガーとシェイクをたべる。どこもそうだが、ファーストフードのうけつけは女子高生専科といった感じである。奥では、男子高生らしき若造がフライドポテトを揚げています。

何故、女子高生かわかったかという、スカートが高校の制服のまんまだ。まだ、日本ハムの優勝がきまったばかりか、キャンペーンはやっていなかったような気がする。もっとも。こちらは『東北楽天イーグルス』以外眼中にない地域であろうから……

2階の禁煙コーナーで、例によって、ひとりでブタみたいにガツクこと2分。平らげて、脱兎の如く店を後にする。国分町は、いけないし、いかない。そうおもいうと、ドヤ

外にすら泊まれない自分が情けない。そうおもうのが、アーケードを歩き続け、やはり、商店会の力強さには唖然とする。皆、活性しているのである。

ウチの県はクルマがないと、アーケードのある商店街にはいけないが、駐車違反の取締りを民営化したために、めっきり客が減ったのだ。その点、仙台はクルマなんかいらんないから、いつまでも、だらだらと街を徘徊することができる特権つきだ。

冒頭にも書いたが、ほんとにダイソーやマツモトキヨシ、貴金属と伊勢崎モールとなんらかわらない、商店街だが、9時半ごろまで、待ってみたが、フォーク野朗はいないようである。それと、ブティックの入り口には、都市部はかならずしも、とっていいほど、黒人のアンチャンがつたっている。2~3人。

彼らと話したことはないが、ヤクの売人ではなさそうだ。みんなそれぞれ、たのしそうだ。

ヨシギューやスタバも全国各地この時間体は満員御礼状態だし、10時ごろになると、やっぱり、ちらほらと店を閉め出すところもでてきた。こういうのは、老舗が多いようである。不動産屋とか、判子屋だったりする。」

ロヒがまだ効いているが、ここの、おそらく仙台最大であろう、HMVはって見た、ここで意地悪な問題を出してみる。

「ニューエイジ」はどこにある？

『ニューエイジ』とは、どこのカテゴリにも所属しない音楽で、このコーナーがあるかないかによって、店の規模がわかる。店員さんはニコニコしながら。

「三回にございます」といってくれた3階！！

エスカレーターに乗っかり、3階につくと、東京のタワレコほどいかにないが、ウチの県の最大級の店なんか、比較にならないほどデカイ、『ニューエイジ』コーナーがドッカーンとよういされている。マイナーといったら失礼だが、ヒーリングで私がはまっている della 社の CD の試聴コーナーまで設けちゃっているのだ。

自分自身のために旅の思い出として一枚買ってみる。店員のオネエサンに「旅行者なんだけど〜」

といったら、

『松島海岸とかいかれたんですか？』とかえってきた、そんな有名な地域も知らなかったと、後で恥におもうことになるが、とりあえず、『明日回ります』といったら、オネエさんはにっこりして、『よい旅を』だって、こういう店員と客の会話は東京では成立しないし、ウチの県でも無愛想だが、チャリンコのオネエサンといい、HMV のオネエサンといい、基本的にはバリヤーは張ってないみたいだ。それでも、もう一つ、地元のラーメンが食ってみたく、満腹なのに、某、とんこつラーメン屋にとびこんだら、コッテリ系というより、ラードそのまんまじゃねえか！というくらい、ドロドロのラーメンが出てきた。喜多方もクソもなく、食券は既にだしてあるので、たべる。どこへ、いってもハズレくじばかりじゃー。

10時半になると、もう4分の3は締まるので、ホテルに戻る途中、コンビニで、牛タンカレー450円と書いてあるから、買ってからもどってみた。

ホテルでは、相変わらず、気だるそう煮している、中年女性がでてきて、モーニングコールを5時半にしてもらおう趣旨のことをいったら、おどろいていたので、それほど、一日中かけて、回らなければならないほど、デカイ都市ではないので、チェックアウトギリギリの9時半にもらった。ここのホテルは酒は禁止らしい。カプセルの中で、早速、牛タンを食べてみたが、フツーの焼肉と大して変わらないので、愕然としてしまった。

多分、私の味覚がバカなんだろう、といいきかせながら、テープに吹き込んだ。今日のレポートを喫煙室という名のロビーで、まとめた後、風呂に入ったら、ウチより狭いくら

いの風呂なので、びっくりした、ただ、ヨコハマの某カプセルホテルよりは清潔である。パンツ一丁のまま、廊下をあるいて、カプセルに入り、テレビのチャンネルをパチパチ変えても、たいしたものはやっていないようである。ちなみにカードラジオは、やはり建物に入るとはいらない。

結局、寝る以外やることがないので、11時とちょっとはやいのだが、眠りに就いた。これがいちばんいいのじゃ！

カプセルホテル4件目になると、もう、そうなるか予想がつくであろうが、やはり、5時おきになってしまった。寝たフリしても、に就こうとしてもガンと覚醒してしまう。

仕方なく、荷物をまとめ、例によって、筋肉痛のカラダをひっぱり、チェックアウトを済ませようと、受付にいったら、例のオバサンがでてきた。(この人一体いつ寝ているんだろう！)

明け方の広瀬通りにでると、道路の上で寝ている身だしなみのキチンとした人とかいるが、『このくらいの度胸はもちたいもんだ』とおもって、通り過ぎる。せっかくだから・・・とおもい、地下鉄の入り口に入ると、いかにも、遊び人風の女の子が4~5人はしゃいでいた。通路のスピーカーから、クラシック音楽が聞こえてきてかなり、上品であるが、初乗り『200円』と江ノ電なみだ。高い！それでも、ラッシュ時には7分に一本の割合ででているから、やはりクルマはいらないことを確認する。再確認だ。

たった、一駅で仙台についてしまい、駅は鉄道以外、商店は立ち食いそば以外なにもやっていないし、出勤通学の皆様もいらっしやらない。あー地方都市！とはいいたくないので、対食いそばで、400円のカレーを食べた後、いつか、テレビでみた、新興住宅地になっているらしい、泉区にいてみることにした。まだ、帰りのバスまで、17時間もあつるし、金もまだあつるし、そもそも、そのニュータウンが、今回の取材の売りなのだ。

ガラガラの電車で揺られて、駅へつくと、思ったとおり、フューチャーシティーだった。だが、サイバーシティーではない。

まず、駅を降りて、歩道の確保が充分なされている。信号では、盲人用の音になる。電信柱がなく、災害時に危険がない。緑豊、当等賛美してもキリがないほどである。もちろん、ターミナルもあつて、ここだけでも充分ベッドタウンなのに、ベッドタウンのベッドタウンというのもあるらしい。レンガ、と植え込みの木だけの通路というのもある。ただ、都会的象徴とも言うべき、マンションのただのオンパレードだろ？といわれてもしかたのないことだが、一軒家より、マンションのほうが好きなわたしとしては、ここにずうっといたいと、思ったし、それも、絶対適わぬ夢とも核心できた。数年前旅行で要つた札幌市



の『あいの里ニュータウン』と類似している嫌いがある。

とにかく、コンビニと、マンションとスーパー以外何もないのだが、地下鉄で十週数分も揺られれば、何でもあつる街なのだから、逸れはそれでいいような気がする。カメラでパシャパシャと輝かしい、住宅団地、集合団地を撮っていると。子どもたちの声が聞こえ始めたので、『近所でカメラを撮りつづけている不審な男がいる』と警察に連絡がいきそうな気

がしないでもないので、

黄緑のような蛍光色のような、防犯の服を着た保護者が出てくるころに、再び仙台に戻ろうとしたら、今度は、凄いのだ、スーツをビシッ都決めたサラリーマンの皆様とブレザー制服を着た、通学者たちが。

電車は満員、ただ、痴漢できるほど混んではない。けれど、窒息しそうだ。それでも、平然としている、仙台市民の皆様はこれから仕事なのに、意気揚々とされている。自分が都会人じゃないことを痛感させられる。

依然私は200万近くいるらしい街の大学にはいったが、やはり、偏差値が似たかよったかの『東北学院大学』にはいれば、このスーツ軍団の一員として生きていたに違いない。200万近くいるらしい大学に入ったことをチクチク後悔する。

再び、仙台にもどってきて、それでも、あと11時間があるので、市内観光バス『るーぷる仙台』にのり、あちこち降りたが、基本的に、くどいようだが、計画的に作られ未来都市と形容せざるをえない。もっと早くきていけば、これが励みになり、東北大学すらいけたに違いないと、いつもの妄想壁まででてきてしまった。それほどに仙台は素晴らしい。そのバスを降りたり、乗ったりして、2週して、改めて、をかしなり、と絶賛する。

それで、もういくところがなくなったので、

観光案内所に、『どこに行ったらいいでしょうか』と訊いたら、標準語を喋るオッチャンが、「そんなこと聞かれても困るよなあ、何処何処へ行きたいっていうなら教えるけどさあ」なんて、ふてくされている。

これだから、転勤族は～（怒）などとおもったりするが、アーケードにもどって、疑問におもうことがあった。仙台のキーホルダーを売っている店がないのだ。（！）伊達政宗キーホルダーとかあってもいいようなきがいないでもないし、こうした物品の収集が趣味となっている人間にとっては、遺憾である。もう一つは、これは、東京でもそうなんだが、日本では異端扱いされている、マッキントッシュの専門販売店があるのだ。ある意味、MACを使っている人間がいるとおもえるだけで、都会というイメージがつかまとう。

ウチの県では、電気店が競って激安販売をしているが、MAC そのものがない。ウィンドウズオンリーである。それと、この本を執筆するにあたって、京成上野駅、桜木町駅、仙台駅と、こぞって、拉致問題や非核運動の署名活動をしている人間が都市部と呼ばれているところには、必ずとっていいほど、いる。

例によって、官憲に個人情報が出て、盗聴を恐れた私は素通りした、チキンだ。

そこで、昨日の HMV のオネエサンの顔が浮かんできた『松島海岸にはいかれたんですか？』、松島海岸？ 駅員に聞くと片道400円でいけるとのこと。 そうなれば、きまったようなもので、仙石線に乗り込んだ。仙石線とは、読んで字の如し、仙台—石巻市を結ぶ鉄道である。その他にも、山形市と結ぶ仙山線等が存在する。プラットホームへつと、出発のベルが鳴っている。ただ、関東でいえば、京浜東北線の一昔前の型をつかっているらしい。ドアは自動開閉ではなく、ボタンを押す、主導。ローカルなんだか、通勤圏電車なのかかわからない。それでも、乗客はシートは満席。

若い女性もちらほら目立つ、クルマが足になっているウチの県とは大分違い、『みんなで乗れば、電車賃が安くなる』という節約かの集いだと、妄想的に想像する。

乗車すること、30分くらいまでは、いかにも都会らしい都会だが、多賀城市あたりから、鈍臭くなってきた。それでも、整備されている、地域もところどころあったりする。

一体、市議、県議はどういう街づくりをしているのか、ますますわからなくなる。例えば、『錆びれている。シケているなあ』とおもわせるとおもったら、フェイントをかけて、美しい並木道があったり、それを過ぎるとまたひなびた家が目立ったり、とぎつぱらである。「塩釜」までいくと、ウチとほとんどかわらない、こうして、「松島海岸駅」に着

いた。

駅近郊というのは、どういうわけか、赤錆びている町並みのイメージが強いが、これは潮風による、錆だから、赤いのだと判明する。軍艦の海面下が赤いのおなじだろうか？いかにも、第三セクターでやっているであろう、稼動しているのかどうかさえわからない、「マリニピア」沿いの通りのトンネルをくぐれば、イキナリ海岸であるが、駅でみた遊覧船、1400円50分ってのは、ぼったくりではないだろうか？

それでも、海岸にはシーズンオフのせいか、2～3人野郎がたむろしているだけで、なにもない。公衆トイレと、自販機以外なにもない。夏になれば、湘南海岸のように水着ギャルでごった返すのであろうとおもったら、遊泳禁止と書いてあった。地元の人夏はどこへいくのであろうか？ それでも、中学時代に国語の授業でならった、

「松島や、ああ松島や、松島や」といったさるお方の歌がでてくる。仙台は山間地域がないから、海が恋しいということは、ないだろうが、ここはなんのための駐車場だろうか？と思ったりする。沖辺では、遊覧船が3隻も4隻も動いている。観光というにはあまりにも寂寥としている。それでも、駐車場には、大型車用の停車位置もある。

都市部と農村部の比較論から逸脱してしまったが、とりあえず、釣り人もいないし、観光としては使えない。入水自殺にはもってこいである。

ただ、電車で40分たらずのところだが、強制的に歩かざるを得ないということはない。ベンチもあるし、足が棒になったので揉み解すこともできる。『やはりさもしいなあ、』ともいながら、海岸を後にして、駅に戻り、キヨスクで、「東北でしか変えない新聞ください」といったら、河北新聞というのを手渡された。河北新聞(!)完全にローカルでおもしろい。ただ、記事は、全国紙とたいしてかわらない。東北のことばかり書いてあると思ったのだが・・・」。

そう、駅で、ポーっと新聞を読んでいると、売店のオバちゃんが笑いながら

「お兄さんファスナー空いてるよ」と忠告してくれた。そーかー、一日中チャックをまるだして、仙台市をねえ～。

ニヤニヤ、笑っていると、もう電車の到着時間だ。プラットホームで電車を待っている客の服装、年齢層、荷物量などから、一目で観光客でないと判別できる。ひょっとしたら、札幌同様、ここはビジネス地であって、観光地ではないのだろう、と、さっきのアーケードの、土産やのなさといい、要するに、青森、秋田、岩手、山形、福島、格人の合流点、集合店なのだろう、仙台は。就職のためとか、進学のためとか、そういった動機で、でてきている東北人の、東北人による、東北人のための県なのだ、。

カメラをベルトにぶら下げた、荷物の多いマヌケな観光客は私一人ってわけか。そういえば、街中のホテルもビジネス〇〇ってのが多かったしな。

しかし、登りの列車に乗り込むと、前述のとおり、活気に満ちている。下校時間か、女子高生がめだつが、制服も、神奈川顔負けの「おしゃれな」とか「いかした」という、連体詞がつきそうな、制服を着ている。スカートの丈は、テニスの選手か？というほど、短い。

みんな輪になって会話している。イジメ自殺が流行っている今日、彼女らに悩みはあるのだろうか？私がいた高校も進学校でなかったから、皆あつけらかんとしていたが・・・

男子生徒は男子生徒で、またお洒落に気を使っているようで、しょっちゅう手鏡をみている。異性の目が気になる共学の宿命を背負うのが、都会人の照明書だ。その点、ウチの県は、男女が隔離されてて、『イスラム圏か？』と突っ込みたくなるほど、全て別学だから、気にしなくていい、期にないなくていい割には、異性がいなくて寂しいなどと内心おもっているのかもしれないな。

地方都市、首都圏、田舎、共通点は、ケータイ中毒だ。オバサン連中も含めて。

一時間に二本しかないという、仙石線だが、

だんだん、朝の地下鉄のラッシュ時に近づいてきた。多賀城市あたりから。スーツを決め込んで、新聞を読む、インテリサラリーマンもクルマには乗らないらしい。賢明で儉約な存在だ。宮城県民の県民性はかなり高いかも？

仙台駅に戻って、東北本線の本数を見ると、一時間に4本、つまり、15分に一本という計算になる。ガマンのしどころだし、料金も安い。クルマや犬が所得や権威の誇張となっている、どっかのおろか権とは大違いだ。

バスターミナルにもどって、もう一周しようかとおもったが、よく観てみると、ほとんどが、仙台市営交通、と書いてある。地下鉄もそうだった。小泉元総理は小さな政府が好ましいようなことをいっていたが、ケインズのいう、社会の福祉は政府がという、大きな政府がここではしっかり生きているし、市民のためにもなっている。民営化だけが好ましいとは限らないと、革新的発想がよぎるといえるか、もともと、こういった思想の反芻をただけだったかもしれない。札幌もそうだが、大きな政府は最高だ。他に、宮城交通などがあつたが、やはり、主力は市営だ。ヨコハマも市営が幅をきかせているし、大体、民営の地下鉄なんて、無理っすよ。

3週目に乗るのは、やめて、昼食をとることにしたが、午後3時。帰りの高速バスは夜行だから、午後11時初なので、腐るほど時間はある。これまた、仰天するものをみた。

スターバックスに入り、コーヒーの他に、食べ物を注文しようとしたら、出来合いのサンドイッチだけでなく、現地手作りのバーガーまであるのだ。スタバはウチの県にもあるし、よくお世話になっているのだが、透明の冷蔵庫に飾られているサインウィッチしかないものだとおもいこんでいたら、いろいろなバーガーがあるので、大きなカルチャーショックを受けた。

では、まあい、みどりのやまのてせん電気店はどうか？

まず、パソコンコーナーへいくと、予想通り、『何をお探しですか？』とは、こなかった。容姿がよろしくなく、いかにも、「

金持ってません」というのが、一目瞭然だからである。いたずらに、『マックはどこにあるか？』と訊いたら、あちらにございます。と、指でさしただけで、案内はしない。さらに、おちょくりをかけて、「あっちじゃわかんないんですけど！」、店員は『面倒くせえなあ』といった、顔をしながら、案内した。そして考、付け加えた。

「高いですよお」。

こう、バカにされると、こっちから、攻撃をしかけたのだから、反発して、「アキバのマックはもっと安かった！」

店員はこちらが、買うかねがまったくないのでみとおしてだろうか、強豪店がそろっている東京とくらべられましてもねえ～。

とどめだ。

「他店より一円でも高い場合は、遠慮なく販売員にお申し付けください」ってかいてあるじゃねえか。

「しかし、こちら東北なんで・・・」

と。もう、相手の眉間にしわがよっていたので、「じゃあ、買わない」といって、引き返してきた。身だしなみ、言葉遣い、威厳で接客態度がかわるのは、ウチの県にかぎったことではなさそうだ。ちなみにこの本を執筆しているパソコンはアキバで94000円だった。仙台は148000というから、地方は物価が安いというのは大違いといたい。

次にステレオ、オーディオ品販売コーナー。

ここでは、誰もが、客扱いされる。最近MP3の売り上げが、順調のせいか、CD



ラジカセ売り場も随分と狭くなったもんだ。

さっそく、いかにも、元セールスマン風のオジサンが、『アンチャンどうだい、これいい音がでるんだ』『なら、聴かせてやろうか？』といきなり、MD をとりだした。

『まってください、まだ観ているだけです、何かあったら呼びますから』といっても、さすが、セールスの百戦錬磨、いろいろ講釈ならべて、買わせようとしているので、『実は、SD USBケーブル対応のを捜しているんです』という、オジサンはちょっと、不機嫌になって、「ああ、あるよ、ちょっと、たけえけどな」といって、みせたのが、40000円前後のだった。

私はおもった、この手の電気店は、量は豊富だが、メーカー品しかおいてないのである。でもって、ライバル店がいなくなると、自然と、店員の態度も横柄になるものだと。ちなみに仙台にはライバルのOCカメラはない。

オジサンはしつこく付きまとうので、ウチの県のホームセンターで売っている、某電気メーカーと商品名をいうと、オジサンはキレた。「うんなもん、あるわけねえだろうが！」と捨てゼリフをはいてどっかにいってしまった。僕が挙げたメーカーはUSB SD対応で、9800円でうっているのだが……。

カネはほとんど使っていないため、当たらし小型カセットレコーダー売り場に行くと、完全に貧困層レベルの値段なので、小型録音機を店員さんは丁寧に売ってくれて、笑顔でおじぎをしてくれた。売り場にも客としての階級性があるらしい。PC 売売り場は、軍隊でいえば、将官クラスがいくべきところだろうか。

店をでたころから、アタマに不快感がよぎるようになってきた。クスリが切れたのだ。

マツモトキヨシの店員さんに訊けば、この手のクスリは自殺未遂が後を絶たないから、販売中止になった、とのこと。

それに類似したものも、精神薬はドラッグとおなじようなものだから、規制が厳しくなってきた、病院でしか手に入らないとのこと。

しかたなく、酔い止めを飲んで、ガマンするが、たかが知れている。ここまで、クスリが偉大であると思ったと同時に、これがないと生きていけないようにした医者も恨んだ。

ゲームでもやって、気をまぎらわそうとしたが、ゲーセンとパチンコ屋は全国共通で、うるさいだけである。これを騒音としないで、平然としている日本国民は、どういう民族だろうか？外国では、パチンコはうるさいと非難轟々で、定着しなかったのだが、ゲーマーとギャンブラーと日共はどこにでもいるようだ。

最終手段として採ったのは、バスの中で飲もうとした睡眠薬を飲む、だった。

飲むなり、イキナリ意識が朦朧としてきて、ベンチにへこたれて、座り込んでしまった。

そのまま、ロッセリアにはいたり、その電気伝の閉店作業をまったりとながめっていると、感覚は「まったり」なのだが、凄まじい勢いで、時計が進んでいく。

『高速バス切符販売書』で、一休みしようとおもったが、〇〇交通の客だと、その店員に伝えると、物凄い剣幕で怒り出した。

「〇〇交通？、あそこ、こちらに何の情報もよこさねええんだよ」

「え、サイトにウチの会社がリンクしてあった？」じゃあ、苦情いれとくからな！

オジサンかなり、おこっているようである。

そういえば、JR も〇〇交通は何一つわかっていないといっていたな。要はするに、この県では付き合いがなく、デカイ会社なため横柄だから、総スカンくらっていたってわけか。

宗教でいえば、異端が正解だろう。

それでも一ポーっとしていて、意識が戻ったときは、もう、人も酔っ払いくらいしかるいてなく、女学生も男子学生もいない。

## 複雑信教での帰郷

まるで、カフェインイッキしたときみたいに、アタマがカッとするなか、ZZ番乗り場で、突っ立っていると、一人の壮年のオッチャンが声をかけてきた。

「あの一X県行きはこのバス停でよろしいのでしょうか？」

私がそうだとつたえると、オジサンは、そのX県の隣のY県からきたという。

『新幹線を乗り継いでいけば、泊まるじゃないですかー？』

というと、こちらのほうが、JRなんか比較にならないほど安いという。

「往路は乗客が3人でね～多分赤字路線だとおもうよ～」

3人！すると、オジサンはターミナル入り口をみて、『お、あれかな？』と声を挙げた。たしかに〇〇交通と書いてある。

バスはZZ番乗り場に止まるなり、案内人がでてきて、「X県行き～X県行きです～」。

乗客は私を含めて、4人。窓にはカーテンが敷かれ、まるで、囚人の護送車状態だが、乗務員の態度は地元のバス会社が激怒するほど、傲慢でもなく。ただ地元とのつきあいがいいだけだろう。それを地元の会社は悪しきもの、としているのであろう。

と、勝手に憶測を働かせていると出発だ。

走行中はタバコも酒もダメ。私の他4名は深夜のせいか、乗るなりイキナリ寝込んでしまった。私は緊張感がとれず、ピリピリしていて、とても睡眠どころじゃない。更にフロントガラスから、光が差し込まぬよう、前方からもカーテンが仕切られている。真っ暗だ。

この〇〇交通は北は仙台から、南は大阪まででいるらしいが、それでも、鈍行を乗り継ぐ旅より、楽だが、たんなる観光客といった感じがしてならない。というのも、学校の遠足は、必ず観光バスというイメージが払拭できないのだ

途中、パーキングエリアにトイレタイムとして、立ち寄ったが、その度に、売店の店員に『個々は何権何市ですか？』と訊ね、現在位置を確認する。私と乗務員以外は、皆爆睡状態だ。椅子には毛布も用意されていたが、眠剤はもうつかってしまったし、パーキングエリアで一杯引っ掛けて乗ろうとおもったが、酒の販売機はよく考えたらない。

少しの環境の差異で、眠れなくなるとは。自分の神経の細さと、繊細すぎる神経には落胆する。『もう少し、図太ければ・・・』

ラジオは24時、01時になっても放送は続く、ただ、車中なので、ノイズが著しく、使えない。あにより、ピリピリした状態がずっとつづいているのだからな。

例えば、アルバイトの面接室に入るまでの待ち時間がずっと続いているような感じか・・・幼児が、予防注射をずっと待っている緊張感に似ているかもしれない。

それでも、一時間電車に乗っては、一時間接続待ちをして、また一時間乗ったら、一時間説ずく待ちを10回近くするよりはマシだろう。バスのアナウンスが聞こえる。いや～もう、隣のY県にはいったか・・・乗客が一人降りる。

現地到着時刻は午前6時20分だといっていたが、このペースでいくと、始発を待つハメになる。詳しくは解らないが、順調すぎるくらい、道路はガラガラようだ。停車の気配は全く感じられない。窓は見えなくても。

再びラジオのスイッチをいれると、J0XXといっている。もう、ウチの県に入っているじゃないか(!)よく観ると、残り3名は全員カーテンを開けて、外を窺っている。

近いような、遠いような・・・バスは見慣れた、道路を進み、5時半に到着。

ステップを降りると、乗務員が『ありがとうございます』『ありがとうございます』と一人一人、に挨拶をしてくれる。

仙台高速バスのオッチャンはおこっていたが、中堅都市も、やはり向こう三軒両隣だ。

余談雑談。

つい最近まで、見慣れない環境にくと、嘔吐する神経症に苛まれていたのだが、バス

で眠れはしなかったものの、知らないところに出向いても、平然としていられるようになっていることに気がついた。

カプセルホテルも、最初は、ガンとして、嘔吐していたが、取材を重ねる毎に堂々と眠れるようになっていた。ただ、問題なのは、自律神経の弱さだけはどうしても克服できないのだ。医者もいっていたが、これは先天性のもらしいから、諦めざるを得ない。

実際、田舎自宅に戻って来てから、いつもの、不規則生活による、嘔吐、目まい、下痢、倦怠感に煩わされ続けて、書いているのは、2週間後である。強力な精神薬にバックアップされてである。

作家に不規則な生活はつき物であるし、度胸もヤクザ相手にヘーキな顔して、取材をして、名誉毀損で裁判沙汰になってもぴんぴんしているようであれば、務まらない。

強いて言えば、バスの中でも、野宿でも、ドヤ街でも、平気で眠れるようであれば、やっていけないことは確かだし、ライターに限ったことではないことで、サラリーマンでも同じであろう。今回が一番遠出の取材だったが、わかったことは地方都市のことより、自分の虚弱さだけかもしれない。